

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04724

研究課題名(和文)音楽科授業における熟練教師の実践知解明によるメンタリング・プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of mentoring program by elucidating practical knowledge of experienced teachers in music class

研究代表者

高見 仁志 (TAKAMI, Hitoshi)

佛教大学・教育学部・教授

研究者番号：40413439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、音楽科授業における教師の実践知を2層から構成されるものとしてとらえ、各層を「即時の知」と「信念・価値観としての知」として位置づけた。その構造モデルをふまえ、熟練教師の音楽科授業における優れた特徴を「状況把握としての思考」「判断としての思考」「(教授行為の)選択としての思考」の3種の実践知として提示した。

こうした熟練教師の実践知の特徴を基盤として、音楽科授業を行う新人教師の「即時の知」「信念・価値観としての知」を包括的に抽出した。そのデータに基づいて、知の相互作用も視野に入れた新人教師の実践知解明を行い、音楽科におけるメンタリングプログラムの礎となる提言を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽科では先行例のなかった、教師の「実践知(practical knowledge)」研究に基づくメンタリングプログラム(新人教師教育プログラム)開発の礎を築くことができた。さらには、「反省的实践家(reflective practitioner)」理論による教師教育への提言として結実したことも、学術的意義と捉えられよう。このように、音楽教育研究に対して実践知という新たな視点を導入した点において、本研究は独自性や意義が認められるものと考えている。今後は、多岐にわたる対象を精査しながら、実践知の全体像をダイナミックに描写することが希求されている。

研究成果の概要(英文)：In this study, I considered the teacher's practical knowledge in music lessons as composed of two layers, and positioned each layer as "immediate knowledge" and "knowledge as beliefs and values". Based on the structural model, the excellent features of the experienced teachers in the music class were presented as three types of practical knowledge: "thinking as grasping current situations", "thinking as decision making" and "thinking as choosing options". Based on the characteristics of such experienced teachers' practical knowledge, I have comprehensively extracted "immediate knowledge" and "knowledge as beliefs and values" of novice teacher who teach music courses. Based on the data, I clarified the practical knowledge of novice teachers, including the interaction of knowledge, and tried to make a proposal that is the basis of a mentoring program in the music department.

研究分野：教科教育学

キーワード：実践知 熟練教師 新人教師 音楽科授業 メンタリングプログラム

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

認知科学の進展に伴い、優れた音楽科授業の創造を企図する研究において、教師の思考に着目することの重要性が認められている。音楽科でも教師の思考に着目した研究は散見できたが、授業を行う教師の思考を全て拾い上げ、詳細に検討した例は存在していないのが現状であった。そこで筆者は、研究の第1の柱として、音楽科授業における教師の思考と教授行為に着目し、力量形成に関する研究を進めてきた。D. Schön (1983) のいう「反省的実践家 (reflective practitioner)」理論に基づいて、音楽科授業における教師の思考の構造を提示した。また、音楽科授業中の教師の判断を類型化し、思考様式の特徴を解明した。またこの研究は、音楽科授業中の教師による状況把握の検証と密接に関連づけられ、音楽科において重要な教師の力量が導出された。

次に、音楽科における教師の力量形成過程の探究を第2の柱とした。教師の力量形成過程探究の取り組みについて、音楽科では指摘はあれども、実際に教職経験を詳しく振り返るといった先行研究は存在していなかったからである。この柱に基づき筆者は、教師のライフステージの構造を示し、ライフヒストリー法を用いて、音楽科における教師の力量形成の要因を究明した。この研究は、新人教師が音楽科授業で遭遇する困難や、そこから脱却するために必要となることながら論じた研究に関連づけられた。

ここまで述べた2つの柱を具備する筆者の研究は、音楽科における教師の力量を高める提言として結実した(高見, 2014)。この研究をさらに発展させていくためには、それまでの取り組みには無かった以下の観点を加えることが、焦眉の課題であると考えられた。

- ・音楽科授業を観察する熟練教師の実践知(状況に埋め込まれた知)の解明
- ・上記の実践知を基盤とした「音楽科におけるメンタリング・プログラム」の開発

以上の2点を加えた研究を通して、優れた熟練教師の実践知が顕在化され、そこに筆者がこれまで示してきた提言を融合させることによって、音楽科における教師教育のさらなる進展につながる事が展望された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の3点である。

- (1) 音楽に関する様々な活動に生起する実践知を探究する上で、得られた成果と方法論上の課題を明確にし、実践知の構造に関してモデルを構築し、様々な音楽活動の位置づけについて論究する。
- (2) 上記のモデルを基盤として、音楽科における熟練教師の実践知の特徴を整理する。
- (3) 音楽科授業を行う新人教師の実践知を抽出し、上記に示した熟練教師の実践知と比較しながら、知の相互作用も視野に入れた分析を行う。そこから得られた示唆を基に、音楽科におけるメンタリング・プログラムの礎となる提言を試みる。

3. 研究の方法

実践知解明における最大の課題は、それが暗黙性を具備しているという点にある。このような知は、暗黙知 (tacit knowledge) と呼ばれ、可視化、意識化、言語化、数値化が難しいとされる。しかしながら、顕在化の方法は皆無ではなく、やり方次第では多くの暗黙知が言語化できるという。例えば逸話的観察下の類推記述、仮説検証型の質問等、工夫された行動観察法やインタビューによって、暗黙知の大半を明らかにできるともいわれており、本研究でもこうした方法を主としてとった。具体的な方法は次の3点である。

- (1) 先行研究を詳解することで、実践知の構造モデルを示し、様々な質的研究法の課題を明確にすることで、本研究の方法論上の方向性を導く。
- (2) 音楽科において優秀さを認められる熟練教師から抽出した実践知を、上記のモデルを基盤に分析し、彼らの思考の特徴を描写する。
- (3) 上記(1)および(2)を基盤として、再生刺激法により新人教師(A教諭)の実践知を抽出する。このデータを集約し、文脈に即して多面的な分析を行う。分析の観点は、以下の4点である。
 - ・実践知の稼働が意識的か無意識的か
 - ・即時の知と信念・価値観としての知の稼働と概要
 - ・状況との対話に関して
 - ・即時の知と信念・価値観としての知の相互作用(外在化と内在化)に関してこの結果に基づいて、音楽科におけるメンタリング・プログラムの礎となる提言を試みる。

4. 研究成果

(1) 実践知モデルと適した研究方法

1) 実践知の構造

本研究において実践知 (practical knowledge) を、「個別具体的な状況で発揮され、更新される実践者独自の知識や思考様式、方略の総体」として定義し、研究の中核に位置づけた。また、その特徴としては、①個人の実践経験によって獲得されること、②実践において目標指向的であること、③実践の手順や手続きにかかわること、④実践場面で役立つこと、があげられた。定義からも理解できるように、実践知は複雑性、多面性をそなえ刻々とその様相を変化

させるため、実像をとらえることが容易ではない。そこで本研究では、楠見(2012, p. 12)の解釈を援用した実践知の構造モデルを図1のように設定し、考究の切り口とした。

楠見は、実践知を手続き的知識と概念的知識の2側面から検討し、前者がスキルを実行する知識、後者が問題状況の本質や原理に関与する知識であると解釈した。この論を基盤として、本研究においても実践知を2層から構成されるものとしてとらえ、それぞれを「即時の知」と「信念・価値観としての知」として位置づけた。即時の知とは、活動の中で実践者が目的遂行や問題解決のために状況に応じて稼働させる、いわばスキル実行の知である。信念・価値観としての知

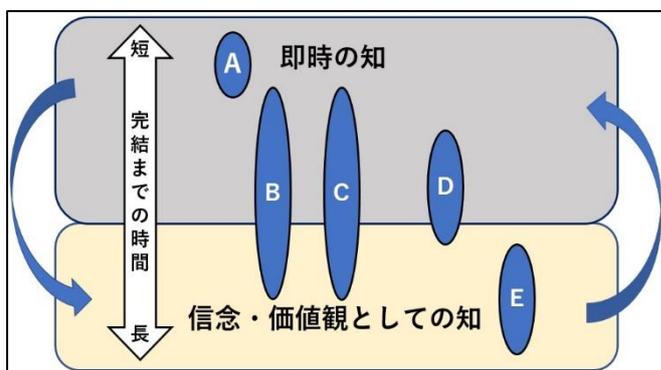


図1 実践知モデル

とは、即時の知が稼働するプロセスに影響を与え方向づける本質的かつ原理的な知である。これら二つの知は、スタティックに存在するのではなく、相互に関与し往還しながら適宜更新されると考えられる。

図1のA～Eまでは、様々な音楽活動を示している。音楽科授業を行う教師の実践知は、Bとして位置づけられた。実践知が稼働し始めてから完結するまでの時間によって類別する視点も加えた。

2) オン・ゴーイング法の可能性

現在、新人教師の職能発達支援を企図する授業研究会では、事後検討スタイルをとることが多い。そのような場でメンターらが新人教師に与える助言は、授業観察中の気づきを基盤としてはいるものの、すでに事後の知見と化した内容 (reflection after action または、reflection on action) で構成される。換言すれば、その状況下でしか具現化し得ない実践知に依拠したアドバイスは組上に載せられてはいない、という点が指摘できるのである。

このことは、音楽科授業研究会に大きな見直しを迫っていると考えられた。すなわち、瞬間的にその場で生起する「音楽に対する“感じ”」(Schön 1983, 佐藤・秋田訳 2001, p. 90) といった直感が鍵を握る音楽科にこそ、状況に埋め込まれた認知に基づく授業研究が希求されるのである。この視点に立つとき、オン・ゴーイング法の可能性が浮かびあがる。

ただし、授業者にはオン・ゴーイング法が適用できないため、授業者の実践知については、再生刺激法が最有力である。授業を行う新人教師の実践知を再生刺激法で抽出し、熟練教師に関しては、今回は先行研究の再分析に基づくことを今後の研究指針とした。

(2) 音楽科授業における熟練教師の実践知の特徴

1) 実践知解明の方法

教師の実践知を解明する方法として、再生刺激法 (stimulated recall method) をとりあげる。この方法の有効性は、多くの研究者に認められている。手順の概要は次の通りである。① 授業の様子をビデオにおさめる。授業者と学習者の相互作用の様子を撮影。→ ② 授業後、できるだけ時間が経過しない早い時期に授業者に録画をみせる。→ ③ 教授行為が生じる度にビデオを一時停止し、なぜそのような教授行為をとったのか問いかけ、授業者の思考を探る。→ ④ 問いかけに対し、授業者が発話したことを記録し文章化 (調査記述) する。このような記述の全場面分を1命題1単位にカテゴライズし、様々な視点から数的、質的な分析を行う。

2) 音楽科授業における熟練教師の実践知の特徴

音楽科授業における優秀な熟練教師の実践知の特徴は以下のように分析された。

- ① 瞬間的に幅広い視点から、児童の細部までを、能動的に、具体的に、豊かな表現でとらえる。
- ② 音楽科の教育内容に関する視点で児童をとらえる頻度が高い。
- ③ 児童個人を見ながらも、同時にクラス全体にも目を向ける。
- ④ 児童の状況に対して具体的な視点を定め、推論し、長期的な見通しをもって判断する。
- ⑤ 状況把握や判断が、教授行為の選択として帰結する割合が高い。

この分析結果は「音楽科授業における教師の力量を高めるプログラムの提言」へと結実した。今回は、次に述べる新人教師の実践知と比較するための材料として活用することとした。

(3) 音楽科授業を行う新人教師の実践知とメンタリング・プログラムの礎

前述した3-(3)の研究手順により、新人教師 (A 教諭) の実践知は、表1のようにまとめることができた。表1にあるとおりA教諭の実践知は、以下の6つのカテゴリーに分類できた。

CAT : A) 状況と対話しながら、明確な外在化・内在化を伴い、適切な実践知が意識下で稼働している。

CAT : B) 内在化が不明以外は、CAT : A の特徴と同じである。

CAT : C) 準備された教授行為をとったため状況との対話は顕著でないが、授業冒頭で問題は無い。それ以外は、CAT : B と同じ特徴。

表 1 新人教師 (A 教諭) の実践知の全容

No.	場面の概要(教師の指導の概要)	CAT	意識/ 無意識	即時の知 の稼働	信念・価値観と しての知の稼働	状況と の対話	目標指向的 な外在化	経験による 内在化
1	ある班から、〈J チョコ〉〈J レー〉〈J ト〉〈J ソー〉〈J ス〉と5拍分の言葉をあてはめたいと発言があった時、三拍子の3拍分にする(〈J チョコ〉〈J レー〉〈J ソース〉)になると範唱する場面。	A	意識	○	○	○	○	○
2	本時のまとめで児童が「お～きなケーキをつ～くろうよ～」のところを立ち上がり歌いだしたので、さらなる身体表現を促す場面。		意識	○	○	○	○	○
3	「お～きなケ～キを」という歌詞のところを歌う時、何人かの児童が自発的に手を大きく伸ばす振りつけをしたのを見て、全員でその振りつけをやろうと促す場面。	B	意識	○	○	○	○	不明
4	「ばくばくべりり」という歌詞のところを、「ば / く / ば / く / べ / ろ / り」の一字ずつ手を打っている児童を見つけ、3拍で打つ練習をさせる場面。		意識	○	○	○	○	不明
5	ワークシートに、自分の考えた言葉を記入させる場面。ワークシートには1拍分を1マスに記入するとあるが、「さくらんぼ」のように5文字になっても、「さく」〈らん〉〈ぼ〉というように書けることを、実際に手を打ってみながら説明する場面。		意識	○	○	○	○	不明
6	どんな言葉をあてはめるか考えている時に、一人の児童が「クリームはどうか」ということをたずねた時、それはいけないと説明する場面。		意識	○	○	○	○	不明
7	本時のめあて「三拍子を手で打って、そこに好きな言葉をあてはめる活動をする」ことを説明する場面。	C	意識	○	○	×	○	不明
8	歌の冒頭のところを、児童が適当な感じでふざけたような大声で歌った時、それを「ぐちゃぐちゃなケーキになってる」と評価し、自然な声でいいいに歌い直しさせる場面。	D	無意識	○ (推測)	○	○	○	○
9 (1)	児童各自が考えた言葉を一人ずつ発言させ、それを他の児童全員で三拍子にのせて、手を打ちながら連続的にくり返して唱えさせる場面。	E	無意識	○ (推測)	○	※1	○	不明
9 (2)		F	無意識	○ (推測)	※2	※3	×	不明

CAT : D) 状況と対話しながら、明確な外在化・内在化を伴い、適切な実践知が無意識下で稼働している。

CAT : E) 外在化は伴うがその場での状況との対話が成立していない。このような実践知が無意識下で稼働している。

CAT : F) 矛盾する外在化が生起し、状況との対話が成立していない。このような実践知が無意識下で稼働している。

以上の結果より CAT : E および F に課題が見られたため(※1, 2, 3), その場面を詳細に検討し、新人教師教育に対し以下の提言を試みた。

提言 1 : 児童と教師の間に即興的相互作用が起きた状況の省察をすること。

提言 2 : 児童の状況だけでなく自身の教授行為の省察をすること。

提言 3 : 信念・価値観, 特に音楽科授業観が外在化した授業か省察すること。

提言 4 : 自身の気づきを重要視したメンタリングを行うこと (ALACT モデル)。

こうした提言を基盤として、先行研究とも関連づけながら、音楽科における新人教師のメンタリング・プログラム構築を標榜し、さらに研究を発展させていくこととしたい。

【引用・参考文献】

D. ショーン (2001) 『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—』 佐藤学・秋田喜代美 訳, ゆみる出版。

[Schön, D. (1983) “The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action.”]

D. ショーン (2017) 『省察的実践者の教育：プロフェッショナル・スクールの実践と理論』 柳沢昌一・村田晶子 訳 (2017) 鳳書房。

[Schön, D. (1987) “Educating the Reflective Practitioner : Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions.”]

楠見孝 (2012) 「実践知と熟達者とは」 金井壽宏・楠見孝 編『実践知：エキスパートの知性』 有斐閣。

砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 (2015) 「幼稚園4歳児クラスの片付けにおける保育者の実践知—時期の異なる映像記録に対する保育者の語り—」 『日本家政学会誌』 66, 1号, pp. 8-18。

高見仁志 (2014) 『音楽科における教師の力量形成』 ミネルヴァ書房。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 17
2. 論文標題 音楽科における新人教師教育への提言 新人教師の実践知解明を手がかりとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽教育実践ジャーナル（日本音楽教育学会）	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高見仁志	4. 巻 43
2. 論文標題 音楽科授業における教師の実践知をいかにして解明するか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西教育年報（関西教育学会）	6. 最初と最後の頁 111-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高見仁志	4. 巻 28
2. 論文標題 PCK理論を基盤とした音楽科新人教師の実践知解明からの提言 Proposal from elucidation of novice music teacher's practical knowledge based on PCK theory	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教師学学会第21回大会論文集	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高見仁志, 齊藤 忠彦, 津田 正之, 菅 裕	4. 巻 49
2. 論文標題 新時代の学校音楽教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽教育学（日本音楽教育学会）	6. 最初と最後の頁 55-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見 仁志, 菅 裕, 大澤 智恵, 森 薫	4. 巻 48-2
2. 論文標題 音楽に関する実践知研究(3) 「知覚」「思考」「行為」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽教育学 (日本音楽教育学会)	6. 最初と最後の頁 67-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見 仁志, 森 薫, 大澤 智恵, 仙北 瑞帆, 菅 裕	4. 巻 13
2. 論文標題 音楽に関する実践知研究の展望 「即時の知」と「信念・価値観としての知」に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽学習研究	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見 仁志, 森 薫, 大澤 智恵, 仙北 瑞帆, 菅 裕	4. 巻 90
2. 論文標題 音楽に関する実践知研究 可能性と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宮崎大学教育学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白井奈緒, 高見仁志	4. 巻 13
2. 論文標題 絵譜の源流をたどる - Grugerドイツ歌曲集“Liederfibel”の日本への受容 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽学習研究	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 臼井奈緒, 高見仁志	4. 巻 17
2. 論文標題 ドイツにおける絵譜の研究諸相 音楽と絵を融合させた童謡集Liederfibel を手がかりに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 佛教大学教育学部学会紀要	6. 最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見 仁志, 森 薫, 大澤 智恵, 仙北 瑞帆, 菅 裕	4. 巻 47
2. 論文標題 音楽に関する実践知研究(2) 「即時の知」と「信念・価値観としての知」に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 第46巻, 第2号
2. 論文標題 音楽科における教員養成の動向 「教師の思考研究」に着目して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 pp.37-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 第1193号
2. 論文標題 保幼小をつなぐ音楽教育 保育者・教師の働きかけに着目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 pp.34 -37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤 智恵, 菅 裕, 仙北 瑞帆, 高見 仁志, 森 薫	4. 巻 第46巻, 第2号
2. 論文標題 音楽に関する実践知研究(1) 方法論上の可能性と課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 pp. 83-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 PCK理論を基盤とした音楽科新人教師の実践知解明からの提言 Proposal from elucidation of novice music teacher's practical knowledge based on PCK theory
3. 学会等名 第21回 日本教師学学会全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科教員養成における『教師の実践知研究』の意義 リー・ショーマンの PCK 理論に着目して
3. 学会等名 第71回 関西教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志, 齊藤 忠彦, 津田 正之, 菅 裕
2. 発表標題 新時代の学校音楽教育
3. 学会等名 第50回 日本音楽教育学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業を行う新人教師の実践知 A教諭の実践知分析を手がかりとした新人教師教育への提言
3. 学会等名 第50回 日本音楽教育学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業における教師の実践知 構造分析と研究の展望
3. 学会等名 第16回日本質的心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業で稼働する教師の実践知分析 - 新人教師のリフレクションを手がかりとして -
3. 学会等名 第15回 音楽学習学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志, 山口孝治
2. 発表標題 A Study on Experienced Teachers' Practical Knowledge in Music Classes
3. 学会等名 JUSTEC
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山口孝治, 高見仁志
2. 発表標題 Research on teacher's movement observation ability in learning outcome
3. 学会等名 JUSTEC
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高見 仁志, 菅 裕, 大澤 智恵, 森 薫
2. 発表標題 音楽に関する実践知研究(3) - 「知覚」「思考」「行為」 -
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 「新人教師の行う音楽科授業」をみる熟練教師の実践知
3. 学会等名 関西教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業における熟練教師の実践知の特徴
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高見仁志, 山口孝治
2. 発表標題 A Study on Teachers' Practical Knowledge in Music Classes
3. 学会等名 JUSTEC (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山口孝治, 高見仁志
2. 発表標題 Research on relation between teacher's movement : observation ability and practical knowledge
3. 学会等名 JUSTEC (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高見 仁志, 森 薫, 大澤 智恵, 仙北 瑞帆, 菅 裕
2. 発表標題 音楽に関する実践知研究(2) 『即時の知』と『信念・価値観としての知』に着目して
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 教師教育の実践と研究 教科の視点から教師の力量形成を考える
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 臼井奈緒, 高見仁志
2. 発表標題 絵譜の源流をたどる - Gruger ドイツ歌曲集の日本への受容 -
3. 学会等名 音楽学習学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業における教師の実践知
3. 学会等名 音楽学習学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高見 仁志, 菅 裕, 大澤 智恵, 仙北 瑞帆, 森 薫
2. 発表標題 音楽に関する実践知研究(1) 方法論上の可能性と課題
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 高見仁志, 齋藤 忠彦, 菅 裕 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 253
3. 書名 新版 中学校・高等学校教員養成課程音楽科教育法	

1. 著者名 日本音楽教育学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 247
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

1. 著者名 有本真紀, 阪井 恵, 高見仁志 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 224
3. 書名 教員養成課程 小学校音楽科教育法	

1. 著者名 高見仁志 編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 227
3. 書名 新しい小学校音楽科の授業をつくる	

1. 著者名 高見仁志 編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 211
3. 書名 初等音楽科教育 保幼小の確かな連携をめざして	

1. 著者名 高見仁志 (分担執筆)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 235
3. 書名 初等音楽科教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>TAKAMI's HOME PAGE https://www.takamiongakujugyou.com/</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考